

# 森田圭子 さん

●特定非営利活動法人  
ホームスタート・ジャパン 共同代表  
●特定非営利活動法人  
わこう子育てネットワーク 代表理事

## 保健師さんは私たちの活動になくてはならない 真のパートナー

読者の中には、ホームスタート・ジャパンのことはすでにご存じという方も少なくないかもしれない。なぜなら、ホームスタートの「家庭訪問型子育て支援活動」は、行政保健師とのつながりが必要になるケースも多いからだ。現在ホームスタート・ジャパンの共同代表を務める森田圭子さんに、活動の実績や実情、保健師との関わり、子育て支援に尽力するようになったご自身の経緯などをうかがった。

●取材・文……白井美樹(ライター)

子育てが大変なとき地域には  
支えてくれる人もいと実感

大学では児童学を専攻していたという森田さん。しかし、子育て支援に関わるようになった経緯の根本には、自らの子育てが大変だったことがあるそうだ。

「現在、生活や活動の拠点は和光市ですが、その前は夫の転勤で大阪の豊中市に住んでいました。全く知らない土地で、当時まだ2歳半と生後10か月という二人の息子の子

育てをしないといけなかったのです。身近に頼れる人がいなかったし、当時は子育て支援センターのようなものもなくて、とても心細く感じていました」

そんな森田さんの心に明るいうかが差し込んだのは、子どもたちを連れて外出し、バスで帰宅する際の出来事がきっかけだった。

「乗ったバスはものすごく混んでいて、座れない状態でした。そんな中、眠くなった下の息子がギャンギャン泣き出してしま

りました。地域には支えてくれる人がいると信じられた瞬間で、今でもそのことが私の根っこにあります」

子育て中のお母さんたちと  
「わこう子育てネットワーク」  
を設立

その後、和光市に移り住むが、当時はまだ新興住宅地で、周りに知り合いもなく、子どもを遊ばせる公園すら未完成だった。ここでも、再び森田さんは行き場のなさを感じていた。

そんな折、市の男女共同参画担当課の声

かけにより、市民公募で広報誌を作ることになり、森田さんも応募。その活動の中で、たまたま自分と同じように子育て真っ只中のお母さんたちと出会い、悩めるお母さんたちが支え合えるような場所をつくることになった。

「これが、『わこう子育てネットワーク』の始まりでした。平成12年から市民団体として親子の集う場所『子育てサロン』を月に1回開催し、ホームページなどで情報の発信も行いました。そして平成16年には、より社会的に信頼される団体として活動するべく、法人格を取得。その後は市の事業

として『おやこ広場もくれんハウス』の運営を委託されたのです」

月に1回しか開催できなかったサロンとは異なり、委託事業となつてからは毎日運営できるようになった。これにより、「支援が点から面に広がった」と森田さんは言う。

もくれんハウスは普通の民家のような造りで安心感があるのか、生まれたての赤ちゃんを抱いてくるようなお母さんも多かった。そこでは子育ての悩みやパートナーとの関係のことなど、いろいろな話が交わされ、心の安らぎの場となった。市の保健師と次第につながるようになっていったのも、このころからだという。困難を抱えた家族を市と連携して支えるようになった



## Profile

●もりた・けいこ●

自らの子育てをきっかけに2000年より子育て中の仲間たちと、子育てサロンや子育て情報発信を行う子育て支援団体、わこう子育てネットワークを設立。2004年、和光市子育て支援拠点（現在は和光市北第2子育て世代包括支援センター）もくれんハウスを市から受託し運営。2006年からホームスタート・ジャパンにも加入、2020年からは共同代表の立場となり活動中。

●わこう子育てネットワーク  
<https://wa-kosodate.com/>

●ホームスタート・ジャパン  
<https://www.homestartjapan.org/>

からだ。

## ホームスタート・ジャパンへの加入を決心

このように、和光市で活動するようになった森田さんが、ホームスタート・ジャパンの存在を知ったのは、平成18〜19年ころだった。代表者の西郷泰之氏から、「一緒にやってみませんか」と誘いを受けたのだ。

「ホームスタートは、イギリスで1973年に始まった地域ボランティアによる訪問型ピアサポートで、現在では世界の22の国々で実施されています。研修を受けて資格を取得したオーガナイザーが訪問家庭への支援内容を調整し、養成講座を受講した地域のホームビジターが家庭に向いて傾聴や協働などの活動を行います。」

ホームスタートを知ったとき、優れた仕組みだと思いつつも、すぐには『やりません』と言えませんでした。自分たちがまだはつきりと組織として確立しておらず、運営資金も自分たちの持ち出しなのか助成金がとれるのか分からず、スタッフ間でどうするべきか議論を重ねていたのです。

でも一方で、訪問支援の必要性は、それ

ケースワーカーさんなどつながらないわけにはいきません。そこで、市の担当課にも参加してもらい運営委員会を開催し、活動を報告するなどして信頼関係をつくっていききました。それにより、利用者の紹介もしてもらえるようになってきました。

やがて、平成25年には市との共同事業になり、平成26年に正式に和光市の子育て支援事業となったのです」

全国のスキームは民間団体であることが前提だが、既存の団体がホームスタートを導入したり、新規に団体を構成したり、成り立ちはさまざまだ。だが、現在では和光市のように、市の事業に位置づけられているスキームが6、7割を占めているという。

## ホームスタート・ジャパンの共同代表に就任

森田さんは、ホームスタート・ジャパンでも活動し、理事も任されるようになる。厚生労働省に制度面のことで働きかけたり、全国でホームスタートを利用してもらえるように呼びかけなども盛んに行ってきた。活動を始め10年以上が過ぎ、令和2年、ホームスタート・ジャパンの共同代表にも就任した。子育てをとりまく社会について、森



かつて市民公募の広報誌を作った仲間は、いまもメンバーとして一緒に活動している

までの経験からひしひしと感じていました。広場に来て心の悩みなどを話せる人はいいいのですが、どうにもしんどくて広場にも来られず、孤立して子育てに悩むお母さんたちの実態があったからです」

訪問という点、それまでは有資格の保健師しか行けないと認識されていた。しかし、保健師は非常に忙しく、気になっていても回り切れないことがある。保健師を呼ぶまではないけれど、誰かにちよつと話を聞いてほしいということも多々あるだろう。「確かに私たちでは、子どもの発達など専門的な支援はできません。でも、『自分も子育て大変だったのよ』という経験者であ

田さんはどんな変化を感じているだろうか。

「そもそもホームスタートを利用できるのは就学前の親子でしたが、産前産後の寄り添いが大切とされ、いまでは妊娠期にも使える新しいプログラムが開発されました。」

さらに、切れ目ない支援ということになれば、就学後の支援も必要です。実は、前年度は学齢期のプログラムを試行する予定でしたが、コロナ禍で十分にできなかった。今年度に行う予定です。これを実施するとすれば、教育委員会ともつながっていく必要があると思っています」

コロナ禍におけるホームスタートの活動で大事にしていることも聞いてみた。「コロナ禍では特に子育て中の家庭が孤立しやすいため、対応ガイドラインを作成し『会いに行けなかったら、インターネットなどのツールを使ってでもアプローチしてほしい』と各スキームに伝えていました。実際にどうするかはスキームの判断で決めていますし、行政の指針に従って動いているところもあるのが現状です」

## 保健師さんは活動における真のパートナー

では、今後の展望についてはどうか。

るボランティアが行けば、悩んでいるお母さんも自分の悩みは話しやすいでしょうし、少し話を聞いてもらっただけで気持ちが落ち着くのではないかと思います。このようになちよつとしたことが、子育ての日常を支えるのだと思いました。そこで、考えた末に、まずは助成金をもらいホームスタートに取り組んでいく決心をしたのです」

## ホームスタートの各運営団体が行政に位置づけられながら増加

平成18年に設立したホームスタート・ジャパンは、平成20年には日本国内4か所（東京都2か所と熊本県、大分県）で試行事業を実施した。このころから、森田さんはメンバーとして活動に携わった。

平成21年、日本で初の「ホームスタート・オーガナイザー養成コースが開催され、これを機に日本各地で本格的なスキーム（各運営団体）が立ち上がっていった。その数は年々増えていき、現在では全国110か所にスキームが広がっている。」

「私たちのNPO（わこう子育てネットワーク）では、当初は自主事業としてホームスタートを始めました。自主事業であっても訪問を始めるとなれば、保健師さんや

「困ったときに、地域にホームスタートという訪問支援があることをもっと広く認知してもらいたいです。そして、利用者の子育てに、ずっと切れ目なく寄り添ってほしいなと思います」

ホームスタートが認知されてきた背景には、保健師の協力が大きいという。保健師からの紹介が多めの利用につながっている。初回訪問のときには、保健師が同行することもあった。

「自治体の中で私たちの組織のことを一番理解してくれているのが、何と言っても保健師さん。後ろに保健師さんがついていてくれるととても心強いですし、真のパートナーだと思っています」



明るい光が差し込む落ち着いた相談スペース。もくれんハウスの名前の由来となった木は建て替え後も残った。たくさんの新しい思い出を今後も見守っていくだろう